

# スキャロンのロマン・コミックと フリュティエールのロマン・ブル ジョアの登場人物に関する比較

古 橋 義 之  
堀 田 英 毅

## 目 次

- 序論 二作品の登場人物を比較する意図  
Ⅰ 登場人物の選定について  
Ⅱ 人物の描写について  
Ⅲ 人物の行動様式について及びこの小論のまとめ

## 序論 二作品の登場人物の比較の意図

周知の通り、十七世紀のみならず、フランス文学史全体を通じても、スキャロンの *Le Roman Comique*、フリュティエールの *Le Roman bourgeois* という二つの作品名は極めて特異である。一般に十七世紀のロマンは、例えば《Le Roman d'aventure》《Le Roman héroïque》というように、《Roman》に形容詞を付してその《Roman》の特色を言う場合が多い。しかしこの小論で扱う《Roman》の二つの形容詞、《Comique》及び《Bourgeois》は作者自らによって名付けられたものであり、しかも題名の一部にもなっている。こうしたことは他にあまり例を見ないことである。

この二つの小説の成立過程の説明として作者に関する若干の伝記をここに記しておく。

Scarron も Furetière も実に不幸な作家である。Scarron は名門の家に生まれながら、継母の手で育てられ、物心つくとすぐ寄宿舎に入れられ、

ほとんど両親の愛情を知らぬまま成長している。青年になってから、abbéの職を買い、マンの町に abbé として赴任する。このマンの町で不治の病に倒れ、両足不具のままパリに帰還する。こうしてそれ以後彼は車椅子に坐ったままの生活を強いられるが、彼は実に陽気で彼のまわりには当時の著名な文学者達が常につきとっていたと言われる。

そして死期の近づくのを知っていながら彼の家では声高な談笑が絶えなかったといわれており、彼の剛気な性格が窺えはするが、反面美しい妻 Françoise との間に子供も無く、やがて彼女も Madame de Maintenon として彼から離れていったこと、あるいは *Le Roman Comique* の完成を見ぬまま他界する運命にあったこと等々のことを考え合わせると、そうした快活な談笑に隠された彼の苦しい心中が察せられて余りある。

一方 Furetière の生涯はほとんど不明であるが、数多くの詩が認められ、アカデミーの会員にまでなりながら、いわゆる Furetière 辞典の編纂を始めた頃から次第に友人、知人に疎遠にされ、全く自力でこの仕事を続けることになる。そして遂には健康を害し、貧困と孤独の中に客死したと伝えられている。彼の唯一の小説が、この小論で紹介する *Le Roman Bourgeois* である。ところで、彼の死後も、彼に対するアカデミー、あるいは文学者達の攻撃は執拗にくり返される。ただ彼がアカデミーを無視し、これに反抗したという理由で、彼の辞典はもとよりこの小説も長らく陽の目を見ることはなかった。辞典の方はアカデミーのそれに4年先だって、フランスではなく、Rotterdam に於て1690年に出版されている。彼の死後のことである。

又、この小説は 1852年に Francis Wey によって認められ、この小説に対する中傷めいた批判に反批判を加えながら、彼はこの小説の長所を浮きぼりにした。そして彼の説は 1854年 Charles Assebineau によりさらに弁護と同意がなされ、この小説の真価が世に問われる訳だが、それも約二世紀もの空白があった後のことである。

この二つの作品は単に題名ばかりでなく、次の様な共通点を有している。  
第一に、十七世紀のロマンは二つの潮流に大別できるが、その一方の潮

流にこの二つの作品が属していることである。

その一つは1607年に出た Honeré d'Urfé の *L'Astrée* を頂点とする。《*Le Roman d'aventure*》及び《*Le Roman héroïque*》と呼ばれる一連のロマンの潮流である。この潮流に属する作品は、上流貴族階級の洗練された知的な趣味を満足させることを主眼として作成されたものであり、フランス語自体の表現の典雅さと豊かさを後世に遺したとはいうものの、作品自体は貴族階級の没落と共に次第に人々の眼から遠ざかっていったのも故なきこととは言えないだろう。

もう一つの潮流は、中世の《*L'esprit Gaulois*》を継承した作品群である。例えば Sorel の *Histoire Comique de Francion* であり、Scarron 及び Furetière の上記の二作品も又この流れに属している。

第二の共通点として、明確な主人公の設定をどちらの作品も意識的に避けていることがあげられる。

第三に、登場人物の描写法における共通点があげられる。例えば両者共、むしろ醜いと思われる人物ないしは人体の一部分に描写の力点が置かれ、努めてリアルな表現法がとられていることなど。

第四に、作者の意図が少なくとも、当時の社会制度及び、風俗、慣習、モラル等への鋭い諷刺、あるいはそれからの超脱という方向に向けられていることなど。

この小編で取り扱いたい共通点は以上の四点であるが、詳細な点に関して言えばさらに抽出可能なことはいうまでもない。特に作品の構成について看過できぬ共通点が認められるが、*Le Roman Conique* は二部まで作者自身の手で扱われるが三部以後は他人の作であり、作品全体の厳密な構成上の比較には不適當とも思われる。又、第一の共通点は十七世紀のロマン全般に亘って言及し検証する必要のある課題でもあるので、この小論では割愛せざるを得ない。

この小論では、従って、第二、第三、第四の共通点を比較対照しながら、同時に二つの作品の登場人物及び作品自体の特徴を鮮明にするよう努めたい。さらに、こうした比較を通して二つの作品に登場する諸人物の全体像

が浮かび上ってくれば幸である。それらの人物像は、あの強烈な性格を帯びた *molière* の創作人物達、例えば、スガナレル、アルセスト、フィラント、ジュールダン、アルパゴン、クレアント等を連想させずにはおかないだろう。

なお 上記の *Sorel* の作品は、人物選定、人物描写等でこの二つの作品とはかなり異っており、作品の内容自体多くの共通点を有しているが、この小論では比較の対象にしなかった。

## I 登場人物の選定について

先にも少し触れたが、*Le Roman Comique* にも、*Le Roman Bourgeois* にも特定の主人公はいない。*Scarron* は作品の中でその理由を述べており、又 *Furetière* も冒頭で主人公の不在を表明している<sup>1)</sup>。従ってどちらの作品にも重要と思われる人物は10人を越えてしまう。以下に重要な人物の名前と職業をそれぞれの作品について列挙してみたい。

### *Le Roman Comique*

*Destin*……旅まわりの劇団の一員で芝居では常に主役を演じる。地方小貴族の出身だが、その幼少年期は不遇。

*Etoile*……貴族の出身ではあるが、やはり旅役者。*Destin* の妹と称しながら実は彼の恋人。

*Rancune*……生まれながらの *Comédien*。異様な姿と徹底した人間嫌いは異色。

*Ragotin*……弁護士。終生 *Etoile* に片思いし遂には全て失う哀れな小男。

*La Rappinière*……マンの町の中級可法官(*Lieutenant du Prévôt du mans*)

*Léandre*……地方大貴族出身の旅役者。当初 *Destin* の従僕として一座に加入。

*Roquebrune*……詩人であるが、世に認められそうもない駄作ばかり作っている。

Verville……Destin が書生として住みこんだある帯剣貴族の家の次男。理想化された貴族。

Saint-Far……Verville の兄で、弟とは対称的な性格の持主。

Saldagne……妹と三人で住んでいる貴族、二人の妹を Verville, Saint-Far に嫁せる。Destin を終生敵としてつけ狙う。

Curé de Donfront……聖職者。姪と共に誘拐される。

Ferdinando Ferdinandi……大道商人。ペテン師。

Inezille……この商人の妻。教養があって美人。

Angélique……Léandre に慕われる女旅役者。

Caverne……生来の旅役者 Angélique の母。

La Garouffière……マンの最高行政官の一人。理想的な *Gentilhomme* で、Scarron の文学観を代弁する。

以上の人物は Scarron の創作であるが、三部まで入れるとさらに増える。

物語は Destin と Etoile, Léandre と Angélique の二つの恋物語を骨子として構成されており、その意味では彼等が主人公としての資格を有しているが、各章ごとに上記の人物達を中心にした独自の物語が挿入されており、このロマンに多彩な色どりを添え、読者を飽かせない。その意味ではやはり全員が主人公である。

### *Le Roman Bourgeois*

#### 第一部の主要人物

Javotte……町人娘。箱入り娘の為世間知らずで、「アストレ」を読まされて恋に目ざめ、アストレの如くふるまい、遂には修道院に入れられる。

Nicodème……弁護士ではあるが、女たらしで、夜になると盛装し女を口説きに出かける。

Vollichon……代訴人、Javotte の父、世の中の全てを金銭で割切ろうとする。

Lucrece……大法官廷の会計検査官の娘、身寄りがなく、ある弁護士に育てられる。

Hypolite……コケットな町人娘。

Marquis……Lucrèce の恋人で、子供まで作りながら、最後は彼女を見ずてる侯爵。

Villeflatin……代訴人。

J. Bedout……弁護士 Javotte の見合の相手、最後は、修道院に入っ  
た Lucrèce と結ばれる。

Laurence……Bedout の従妹。

Angélique 教養ある町人娘、作中物語「迷子になったキューピットの話」の作者。

Philalèthe……教養高い Gentilhomme

Charroselles……発表機関を持たぬ文学者 Sorel をモデルにしている  
と言われている<sup>2)</sup>

Pancrace……Javotte に恋する gentilhomme.

## 第 二 部

Charroselles……第一部の人物と同名だが別人。Gentilhomme ぶった  
文学者。

Collantine……訴訟気狂の女。

Belastre……(Magistrat) 中級司法官。無学無教養だが素朴な心の持  
主。

Pauvre Poète……貧困の中に死亡した無名の詩人。(Tristan との説も  
ある)<sup>3)</sup> 財産目録を残し、その内容が最後に紹介されるが、まるでヴィヨ  
ンのそれにも似た感を抱かせる<sup>4)</sup>。

以上がこの作品の主な登場人物である。

一部と二部は全く別の物語から成っている。一部は Javotte と Lucrèce  
という二人の町人娘、前者は箱入り娘だが、後者はコケットな娘という全  
く対称的な二人の娘がどのような経路を経て結婚に行き着くか、その経路  
を骨子として組み立てられた物語である。

作者が狙っているのは、二人の娘を中心にした物語というより、むしろ  
この二人の娘を軸にして、上記の人物達がどのような行動原理で動いてい

るかを描くことにあると考えられる。又、第二部では、Collantine と Belastre そして Charroselles の三人が訴訟と恋を定めぐって、又互の強烈な自我と私利私欲がからみ合い、もつれあったまま上記の詩人の財産目録に出くわすまでの物語である。

さて、こうして二つの作品の主要人物を抜粋し比較してみると、次のような共通点及び相違点が考えられる。

#### 共通点

1. 主要人物は職業の違いはあってもほとんど町人で占められていること。
2. 神話とか著名な物語に出てくる人物とか、あるいは未知の国の人物といった全くの仮想上の人物ではなく、実際に一つの職を有し、生活している人物が主要な登場人物になっていること。
3. 過去ないし未来の人物ではなく、作者と同時代の人物が選ばれていること。

#### 相違点

1. *Le Roman Comique* では、貴族出身の町人、つまり déclassé した人物が多く登場していること<sup>5)</sup>
2. *Le Roman Bourgeois* に比べ *Le Roman Comique* では帯剣貴族から大道商人、あるいは従僕といった風に、登場人物に多様性がある。
3. *Le Roman Comique* の登場人物には旅役者《La toupe comique》に象徴されるように、一つの職業に固執したり、あるいは職業上での出世のみを志向する人物はほとんど見当たらない。

以上の共通点及び相違点から次のようなことが考えられる。

先ず三つの共通点から推して言えることは、二人の作者の視座は、同時代人の中で職業を有し、生活している出身の人間、その中でも特に町人あるいは下層とも思われる世界に据えられていることがうかがえる。そして作者の視線は中でも金銭欲、権利欲、名誉欲、性への欲望等、いわば普通の町人ならば誰しも有しているこれらの欲望を抱きながら、これらの欲望故悩み葛藤する生身の人間の個々の姿に注がれているようである。神話上

あるいは仮想上の人物が一人もないということは、当時の社会制度、風俗、慣習、モラルを熟知した作者の眼に慣れ親しんだ人々しか描かれていないということである。この二人の作者は従来貴族階級の私物にも近かったロマンの世界を、生きた生活者全般にまで広げたと言わねばならない。生きた人間ならば、誰でも小説の主人公になれる可能性を自ら示した作者であるともいえよう。

又三つの相違点は何を物語っているだろう。これは作者の視点がどこに注がれているか、その違いを示しているようである。

*Le Roman Bourgeois* は著者の冒頭の文からも窺えるように、諸々の欲望に自らを忘れ、自らの本来の在り方を失った哀れでおろかにみえる町人達、しかもそうした町人達は作者の身のまわりにいる訳だが、彼等を痛烈に諷刺することで同時に警告を発しているのである<sup>6)</sup>

従って登場人物は平均的なありふれた町人、例えば代訴人、弁護士、うらぶれた文士等が主として選ばれたものと考えられよう。

一方、*Le Roman Comique* は、むしろ当時の通俗的な社会通念、あるいは慣習、モラル等を既にして乗り越えたか、あるいは乗り越える可能性を秘めた個性味豊かな人間が主として選択されている。従って一定の土地に永住しない旅役者達が主人公であり、同時にこの旅役者達に親しみを抱き、彼らと生活の歩調を合わせる人々、例えば Ragotin, Rappinière 等も又主人公であると言うべきだろう。登場人物に限って結論的に言えば、町人達への警告を意識し、その手段として書かれたと考えられる *Le Roman Bourgeois* の登場人物は類型化されすぐた感を抱かせる。一方、*Le Roman Comique* の主要人物達は、通俗的な観念で把握された、いわゆる町人、あるいはいわゆる貴族ではなく、つまり、一つの階層、一つの職業から想像される平均的な人間像ではなく、絶えず流動性を秘め、人間本来の姿に立ち帰ることを志向した人物群から成っていると思われる。

さてこうした人物の選定を前提として、次章ではこうした人物達がどのような言葉で、どのような文章で表現されているかを分析し比較してみた。



## Ⅱ 人物描写について

人物の外観に関する描写は先に挙げた人物全てになされているとは限らない。比較的丁寧になされている者達ばかりを選んで次に紹介したい。

### *Le Roman Comique*

Destin については

Un jeune homme, aussi pauvre d'habits que riche de mine, marchait à côté de la charette. Il avait un grand emplâtre sur le visage qui lui couvrait un oeil et la moitié de la joue, et portait un grand fusil sur son épaule, dont il avait assassiné plusieurs Pies, Geais et Corneilles, qui lui faisaient comme une bandoulière, au bas de laquelle pendaient par les pids, une poule et un oison, qui avaient bien la mine d'avoir été pris à la petite guerre.

Au lieu de chaplau, il n'avait qu'un bonnet de nuit, entortillé de jarretières de différentes couleurs, et cet habillement de tête était une manière de Turban qui n'était encore qu'ébauché, et auquel on n'avait pas encore donné la dernière main. Son pourpoint était une casaque de grisette ceinte avec une courroie, laquelle lui servait aussi à soutenir une épée qui était si longue qu'on ne s'en pouvait aider adroitement sans fourchette. […] (pp. 532—533 Pléiade 版テキスト)<sup>7)</sup>

Ran cune については

Un vieillard vêtu plus régulièrement, quoique très mal, marchait à côté de lui. Il portait sur ses épaules une basse de viole et, parce qu'il se courbait un peu en marchant, on l'eût pris de loing pour une grosse Tortue qui marchait sur les jambes de derrière. (p. 533 ibid)

Ragotin については

Il y avait entre autres un petit homme veuf, avocat de profession, qui avait une petite Charge dans une petite Turidiction voisine. Depuis la mort de sa petite femme, il avait menacé les femmes de la ville de se remarier [...] (p. 551 ibid. 下線筆者)

Cette double civilité fut cause d'une incommodité triple ; car la Caverne, qui avait le haut de la rue, comme de raison, était pressée par Ragotin, afin que Angelique ne marcha point dans le ruisseau. De Plus, le petit homme, qui ne leur venait qu' à la ceinture, tirait si fort leurs mains en bas qu' elles avaient bien de la peine à s'empêcher de tomber sur lui. (p. 626 ibid 下線筆者)

Verville, Saint-Far については

L'ainé avait nom Saint-Far, assez bien fait de sa personne, mais brutal sans remède s'il y en eut jamais au monde ; et le cadet, en recompense, outre qu'il était mieux fait que son frère, avait la vivacité de l'esprit et la grandeur de l'âme égales à la beauté du corps. (p. 584 ibid 下線筆者)

⑩ L'Etoile (別名 Leonore について

Je n'ai jamais rien vu de plus beau. Elle leva deux ou trois fois les yeux sur moi comme à la dérobée et, rencontrant toujours les miens, il lui monta au visage un rouge qui la fit plus belle qu' un Ange. (p. 587 ibid 下線筆者)

⑪ *Le Roman Bourgeois*

Javotte について

Cette fille était pour lors dans son lustre, s'étant parée de tout son possible, et ayant été coiffée par une demoiselle suivante du voisinage, qui avait appris immédiatement de la Prime.

Elle avait aussi un laquais d'emprunt qui lui portait la queue, afin de paraître davantage. Or, quoique cela ne fût pas de sa condition, néanmoins elle fut bien aise de ménager cette occasion de contenter sa vanité. (p. 907. ibid)

Vollichon について

C'était un petit homme trapu, grisonnant, et qui était de même âge que sa calotte. Il avait vieilli avec elle sous un bonnet gras et enfoncé qui avait plus couvert de méchanceté qu'il n'en aurait pu tenir dans cent autres têtes et cent autres bonnets : car la chicane s'était emparée du corps de ce petit homme, de la même manière que le démon se saisit du corps d'un possédé.〔…〕 Il avait la bouche bien fendue, ce qui n'est pas un petit avantage pour un homme qui gagne sa vie à clabauder, et dont une des bonnes qualités c'est d'être fort en gueule. Ses yeux étaient fins et éveillés, son oreille était excellente, car elle entendait le son d'un quart-d'écu de cinq cents pas, et son esprit était prompt, pourvu qu'il ne le fallût pas appliquer à faire du bien. 〔…〕 (pp. 913—914 ibid)

Charroselles について

Ce nez, qu'on pouvait à bon droit appeler son Eminence, et qui était toujours vêtu de rouge, avait été fait en apparence pour un colosse ; Néanmoins il avait été donné à un homme de taille assez courte. 〔…〕 Sa Chevelure était la plus désagréable du monde, 〔…〕 (pp. 1027—1028 ibid)

Sa peau était grenue comme celle des maroquin, et sa couleur brune était rechauffée par de rouges bourgeons qui la perçaient en assez bon nombre. En général il avait une vraie mine de satire. La fente de sa bouche était copieuse, et ses dents fort aiguës : belles dispositions pour bien mordre. 〔…〕 (p. 1028 ibid)

以上紹介した以外の描写はほとんど認め難く、描写の対象となった人物も作者の意のままに選択されたものである。第1章と同様に共通点、相違点を挙げてみたい。

### 共通点

(1) 通常より劣ったと思われる外観，あるいは醜い感じられる肉体の一部に力点を置いた，あるいは誇張した描写がなされている。例えば Le Roman Comique では Destin のまるで一昔前のものと思われる流行遅れの，しかも長旅ですっかりすり切れた着衣，それに騎士とは名ばかりのちぐはぐな風態がこと細かく描かれている。又，Rancune は背が丸み，ヴィオルを担いだ姿が亀に譬えられている。さらに下線部分㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㋀㋁㋂㋃㋄㋅㋆㋇㋈㋉㋊㋋㋌㋍㋎㋏㋐㋑㋒㋓㋔㋕㋖㋗㋘㋙㋚㋛㋜㋝㋞㋟㋠㋡㋢㋣㋤㋥㋦㋧㋨㋩㋪㋫㋬㋭㋮㋯㋰㋱㋲㋳㋴㋵㋶㋷㋸㋹㋺㋻㋼㋽㋾㋿㌀㌁㌂㌃㌄㌅㌆㌇㌈㌉㌊㌋㌌㌍㌎㌏㌐㌑㌒㌓㌔㌕㌖㌗㌘㌙㌚㌛㌜㌝㌞㌟㌠㌡㌢㌣㌤㌥㌦㌧㌨㌩㌪㌫㌬㌭㌮㌯㌰㌱㌲㌳㌴㌵㌶㌷㌸㌹㌺㌻㌼㌽㌾㌿㍀㍁㍂㍃㍄㍅㍆㍇㍈㍉㍊㍋㍌㍍㍎㍏㍐㍑㍒㍓㍔㍕㍖㍗㍘㍙㍚㍛㍜㍝㍞㍟㍠㍡㍢㍣㍤㍥㍦㍧㍨㍩㍪㍫㍬㍭㍮㍯㍰㍱㍲㍳㍴㍵㍶㍷㍸㍹㍺㍻㍼㍽㍾㍿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

(2) 美的な表現，あるいは優美な個所の表現は単調で簡略にすまされている。例えば，下線部分㉑㉒㉓㉔㉕は美の直接的表現には適しているが，あまりにも単調で概念化されすぎている。一方 *Le Roman Bourgeois* の Javotte の表現はかなり手のこんだものだが，しかしそれも，例えば Cela ne fût pas de sa condition. elle fut bien aise de ménager cette occasion de contenter sa vanité といった，皮肉たっぷりの言葉を加えることにより一つには作者が純粹な美，あるいは素朴な美の表現を意図してはいないことと，又かりに美の表現をする時には諷刺の対象としてしか描かないことが認められよう。さらに作者が Javotte の美しさを表現する前に読者に次の様に言っている。 N'attendez pas pourtant que je vous la décrise ici, comme on a coutume de faire en ces

occasions […] この言葉からも推察されるように、作者は Javotte の美しさを描くことにあまり乗り気ではなく、むしろ Javotte の美しさは、華美ではあるが、本来の美しさをそこなった美であることへの批判として受けとれる。こうした表現法で描かれたのは Javotte に限らないが、概して美しさを表現する文はあまりにも少ないと思われる。

#### 相 違 点

(1) *Le Roman Comique* では特に Ragotin の描写に認められるごとく、同じ言葉、例えば petit, のくり返しが行なわれている。あるいは引用は省くが、ある大きな田舎貴族の表現には、大きいことを強張する grand がくり返し使用されている。こうしたことは *Le Roman Bourgeois* には認められない。

(2) *Le Roman Bourgeois* の特に Vollichon 及び Charroselles の表現から伺えるように、人体の一部、例えば、耳、目、鼻、頭髪、皮膚等が詳細に描かれている。しかもこうした一器官ないし人体の一部の誇張的表現が、その人間の職業、あるいは人格の諷刺を意図していることは明白である。*Le Roman Comique* には外観の滑稽さを誇張した表現はあっても、それが職業及び人格まで諷刺したものとは考え難い。

ところで、フランスの十七世紀ロマンの研究家は Scarron の表現法についておよそ次の如く言っている。

#### A. Adam の批評

「Scarron がロマン・コミックを書いた当時は、Burlesque<sup>9)</sup> が流行していた。彼のロマンは *Le Roman burlesque* あるいは、*Le Roman parodique* と呼ぶべきで、Sorel の *Le Bergei extravagant* や、Furetière の *Le Roman Bourgeois* のような Anti-roman でもなく、又 *Le Roman réaliste* とも呼ぶべきではなかろう。」<sup>9)</sup>

#### C. Dédéyan の批評

「Scarron がこのロマンで表現した背景、人物の性格描写、環境、文学理論を考慮すると、特に彼は真実 *Vérité* を描くことに留意し、当時流行していた *Le Roman héroïque* の持っている真実らしからぬこと、

invraisemblance に対し、絵画的な, *réalism* を対置したことに注目すべきである。……》<sup>10)</sup>

《本来, *burlesque* の生みの親ともいえるべき Scarron は, 敢えて *burlesque* という表現法を用いている。》<sup>11)</sup>

#### H. Bénac の批評

《Scarron は確かにある種の真実らしさから出発しているが, 空想的でしかも滑稽であるという二つの特徴的な要素によって, *Le Roman Comique* は *Le Roman réaliste* であるとは言えないし, 又物質の世界を描いた *réalism* 小説でもないし, 心理学的な *réalism* 小説でもない。》<sup>12)</sup>

さて, この三人の意見を総合すれば, Scarron の表現法は真実らしさを描くことから出発しているが, *réalism* 小説というより *réalism* を変形させた *Le Roman burlesque* ないし, *Le Roman parodique* と呼んでもいいと思われる。一方 *Le Roman Bourgeois* については, フランスの二人の研究者は次の様に言っている。

#### A. Adam の批評

《*Le Roman Bourgeois* は *Roman satirique* 及び *comique* の伝統を継承したものである。Furetière は特殊な法則をロマンに導入することにより真の独創性を得たと言える。従来の *roman comique* 及び *satirique* は冒険者達の行動やモラルをもっぱら追っているが, 彼は意識的に自分の住んでいたモーベル広場の一画に住む, ありふれた町人達の行動とモラルと風俗を描いたと言える。彼らの日常生活の様子をまるで絵画の様に詳細に表現している。えてして, 作家というものは, 自分の描く環境, 人物に共感を抱くものだが, 彼には全くそれが認められない》<sup>13)</sup>

#### Francis Wey の批評<sup>14)</sup>

《我々の時代の写実主義作家<sup>15)</sup> の作風に二世紀も先んじながら, 彼はなまの真実でもって小説作成の技術に変えることを目指していたようだ。別にモデルの選り好みをする事もなく。[...] 全てが絵画的無秩序性の中で着飾り動きまわる様は, まるで Callot のデッサンでも見ているようだ。それでも読者を笑わせながらページは先にめくられる。それは彼の才気と

幻想と鋭敏な観察と、そして自然のままに彩どられた生き生きとした場面が縦横に張りめぐらされていることによる。そこには地方色が感ぜられ、人物の個性が豊かに表現されている。全く *molière* そのものだとも言えよう〔…〕。》<sup>16)</sup>

さて、以上のことを総合してこの章をまとめると次の様になるだろう。

先ず *Le Roman Bourgeois* では、環境、風俗、人物等が絵画的な写実的手法を骨子として描かれていること。しかもそこに描かれた人物達には作者の冷酷に冴えた視線がつきまどっていること。又、敢えて言えば、その視線は諸人物達を透視しながら人物達を超え、その背後に横たわる理想的な幻の像を追っているかのようである。*Furetière* の描写の中には確かに滑稽的要素はあるが、しかしそのおかしみ、軽卒さはそれを笑う全ての読者にはね返って来る性質のもので、それだけに痛烈な諷刺の効果をおよぼしているといえよう。

こうした滑稽さは、*Scarron* のそれとは明かに質が異っている。又、*Scarron* にあった肉体の一要素のみの誇張的表現は全く見られず、仮に肉体の一部が誇張して描かれるとしても、必ずその人間の職業とか人格、モラルと結びつけて描かれたものであることが認められる。人物描写に限って言えば、この二人の作者は、仏文学史上から見ても先駆的とも言える、小説にける写実主義を骨子とした描写法を採りながら、*Scarron* は *burlesque* あるいは *parodique* な傾向が、又 *Furetière* は *satirique* あるいは *anti-roman* 的ともいえる要素が色濃く認められると言うべきだろう。

### Ⅲ 行動様式について

*Le Roman Comique* に見られる特徴

#### a. *Comique* な要素

作者が題名の一部としている如く、人物達は実に滑稽にふるまう。先の章で少し紹介したが、旅役者の一行の服装からしてまず異様であり、均勢のとれたものとはいえない。

主として滑稽にふるまうのは Ragotin である。彼は小男の弁護士で、やもめである。Etoile の美しさに引かれ、様々な口実を設けてこの旅役者の宿舎（と言ってもテント張りの場合が多い）に出入りし、彼女が一人で居る時を狙う。始め彼女は Destin の妹であると聞かされていたため、彼は一抹の望みを賭けた訳である。そのため、職業も忘れ彼女に献ずる詩を作ってみたり、又服装も、小男で見栄えのしないにもかかわらず着飾って、しかも馬に乗った騎士ぶりを見せようとして、見事彼女の前で落馬したりする。

こうした、Etoile をめぐっての Ragotin の一連の行動のみを純粹に追って行けば、彼の行動は実に真摯であり荘厳ですらある。彼の行動は全て美の女神にも似た Etoile に献じられたものであり、そこには世俗的な諸々の欲望の入り込む隙さえ見せぬ。

しかしこうした殉教にも似た行動は、世俗的欲望を原理に行動する人間達に苦もなく利用され、見事に裏切られる。<sup>17)</sup> Scarron は先ずこうした Ragotin の殉教的行為、あるいは他人の手中でもて遊ばれる素朴な人間の行為と Rancune あるいは大道商人に代表される悪どい行為とを対比して描くことにより、そこに動的な滑稽さを表現することに成功している。又、Ragotin に代表される外観の貧弱さを誇張することにより、読者に誇張されたイメージを与え、次にそうした貧弱なイメージを背負った人物が演じる真摯な行為を対比させることにより、一種絵画的滑稽さを表出し得ている。

こうした二つの対比関係は Ragotin に限らず見受けられることがらである<sup>18)</sup>

#### b. 漂流者のイメージ

この小説は、ある旅役者の一行がマンというある小さな田舎町に入ってくるところから始っている。作者はその旅役者を一人ずつ紹介しながら同時にそれとなくマンの町の風景と人物を描くことを忘れない。そして人物の紹介が終るか終らぬ中に既に最初の騒動が起る。喧嘩早い役者達と町の遊び人との間に起った派手な騒ぎを早い筆の運びで描きながら、仲裁役と



して先に紹介した *La Rappinière* を登場させる。こうして土地の顔役 *Rappinière* を通じて旅役者達はマンに始めて旅装を解くが、様々な伏線が設けられ、決して旅役者達がマンの町で静かに興行できないことを匂わせておく。その伏線の一つ一つを物語風に紹介しながらこのロマンは先に進んで行く。

こうした筋立ては見事で、読者を飽きさせない。

ところで、寝ぐら定めぬ旅役者を中心に据えたこと自体、既に人物達に流動感を与え、読者を旅に誘う。こうした旅役者の漂わせる旅の匂いを背景に様々なドラマが展開される訳だが、ほとんど全ての人物達の行動は、最終的にこの旅に集約される。その様を少し紹介したい。

先ず旅役者達がいかなる理由で旅役者になったか、その経路が役者各自を主人公にした物語で描かれているが、その中でも特に作者が力を入れたと思われるのは *Destin* と *Etoile* である。

*Destin* は自分の出生から幼年期、そして青春時代と順を追って語って行くが、この語り口はいつしか一つのドラマの体裁をとり、語り手 *Destin* はドラマの主人公に変貌してくる。物と愛に飢えた厳しく物悲しい話は、いつしか青年とその恋人 *Etoile* こと貴婦人の娘 *Leonore* との出会いにまで及ぶ。*Destin* は没落貴族の悲哀を一身に背負い、貧困と孤独とに果敢に闘いながらも、唯一、人間としての誇りだけは守り通す。彼の守ろうとした誇りは貴族としてのそれでもなく、又町人のそれでもない。一切の身分、階級、職業を超えたところにあるもの、つまり人間が自然な状態で自由でありたいと願う本来の人間らしさ以外の何ものでもない。*Destin* はこの誇りにも似た人間の尊厳を守ろうとするために、彼の存在し、生活する所では必ず誰かに嫌われ、敵視され、遂には邪魔者扱いをされ、一定の所に住むことのできない人物になってしまう。絶望した彼は軍隊に志願し戦場での死を願い従軍する。幸か不幸か戦死すらできず、帰途偶然にも *Etoile* と再会する。母親に先だたれた彼女も又貧困と孤独の極にあった。

貴婦人の娘という理由で近づくことさえ憚られた以前の *Leonore* は全てを失うことによって *Destin* と始めて対等の立場で人間らしく接し合う

ことが可能になる。二人が諸国を旅している途中、これ又偶然にも旅役者 Rancune と知り合い、彼等二人も役者として旅を共にする。こうしてできた一つの小さな旅役者の集団は別な役者集団, Caverne, Angélique と合併し、少しずつ役者を増やしながらかつ旅を続けるのである。

こうして一応の体裁を整えた一行が冒頭のマンの町に入ってくるのである。さて、このマンの町でも Ragotin はこの旅役者の一団に身も心も吸収される運命にある。又、La Rappinière もこの旅役者にあまりにも深くかかわり過たため、ついには職を追われそうになる。又、Léande という金持の貴族の息子も家出し、旅役者と寝食を共にすることによって、愛する Angélique と結ばれる。

つまり主要な人物全ての行動は旅に収斂され、旅に向っている。それは、一定の場所、一定の住居、一定の身分、一定の職業から離脱し続けようとする漂流者のイメージを与える。淀みはあっても留まることを知らぬ川のイメージにも似ているといえよう。

### c. 真実らしさ (Vraisemblance) の要素

周知の通り十七世紀における〈真実らしさ〉の問題は極めて重要で、当時多くの詩人学者がこの問題を論じている。《Le Cid》論争に端を発したこの問題は、ついにリッシリューの要請により、L'Abbé d'Aubignac が, Pratique du Théâtre を書き、この中で演劇における〈真実らしさ〉の分析、考察が試みられたことになる。又、Corneille. Boileau も又この言葉の内容に深く拘らざるを得なかったことがらでもあった。<sup>19)</sup>

いわゆる古典主義演劇に表われた〈真実らしさ〉、あるいは d'Aubignac, Boileau の〈真実らしさ〉の概念と、ここいうそれとはいささかのずれがある。ここで言う〈真実らしさ〉とは、いわゆる古典主義演劇を支配した、三一一致の法則とか、あるいはフランス十七世紀的な概念で定義される〈真実らしさ〉ではなく、今日から見て、現代の我々の概念作用、認識作用によって把握される〈真実らしさ〉である。

さて今日でいう〈真実らしさ〉という概念を基礎に Le Roman Comique の登場人物の足どりを追ってみると次の様な足跡が浮かび上がってくる。

(1) 貧困と孤独の描写,あるいは吝嗇振り

例えば Destin の育った環境の描写はすさまじい。一つ例をあげると, Destin の父親は, 口べらしのため彼を里子に出すが, その帰途, 金持の捨て子をひろって帰り金を目当に育てる。又, 父親の吝嗇振りは徹底しており, 自分の女房が母乳で子供を育てているのを見て, 親子三人がその母乳で生活することを提案し, 妻も納得する。そして何日目かに三人共栄養失調で病気になる。

(2) 人物の心理描写

Destin は一種の英雄的主人公であるが, 必ずしも一貫した心理で動いてはいない。恋人 Etoile を有しながら, 誘拐された Angelique を救うため, 一人犯人の後を追う訳だが, 苦勞して追っている中にいつか Angélique にも心引かれる自分に気づく。彼女を救助した後, 彼女に Léandre という恋人がいると知り内心動揺する。この Léandre が始めて身分を明かし Destin に Angélique と結ばれるよう援助を頼む場面は実に生き生きとしている。それは Destin とて必ずしも鉄の如き心の持主ではなく, 人間の弱さ, 迷い, あるいは〈エゴ〉とも呼べる赤裸々な心の裏面を垣間見せているからである。

又, 人間嫌い Rancune は一座の主役を自分の拾ってやった弟子ともいえる Destin に奪われ, その悶々として楽しまぬ内面の描写は面白い。Rancune は一人で三役も四役もこなす能力をもった優秀な芸人だ, が芸のうまさだけで客を呼べない苦しさが, 例えば次のような Destin を評した言葉〈まだ青二才で芸のなんたるかを知っちゃいない〉といったところによく表われている。さらに, この人間嫌いが, 大道商人の妻 Inezilla に恋をしているのは面白い。<sup>20)</sup> このことは誰にも知らせずただ自分の胸に秘めているだけである。こうした心理の二面性というのは人間らしさの裏返しともいえるもので, 今日的〈真実らしさ〉の証しになりはしないだろうか。

*Le Roman Bourgeois* にみられる特長

a. 金銭と結婚

第一部に登場する二組の結婚は全て金銭に支配されていると言っても過言ではない。

例えば代訴人 Vallichon は自分の娘 Javotte の結婚相手として、Nicodème, Bedout の二人を選ぶが、選んだ根拠は二人が金の取れる弁護士であることに拠る。又、町人娘 Lucrece は、一時は侯爵の子を宿す程のコケットな娘ではあるが、修道院をうまく利用して、身持ちの固い、そして金のある Bedout を獲得する。作者は第一部で「金銭による結婚の表」を作っている。そこには男の職業とそれに見合う女の持参金が対になって出ている。この表は一つには当時の結婚という風俗への鋭い諷刺ではあるが、又、事実そうした結婚への考え方が当時の町人の間に相当流布していた証拠ともいえよう。

#### b. 町人の自我意識と訴訟

町人が貴族に対抗できる唯一の力は金銭である。この金銭が町人の自我意識を覚醒させたことは、ただ十七世紀フランスの事実に残らない普遍的なことからであろう。この自我意識が無反省な自己運動をし、ついに訴訟気狂になった女が第二部で出てくる。従って第二部では一步進んだ町人の意識が描かれたものと言える。この訴訟気狂の女は Collantine といい、その容貌、体つき、考え方、そして身のこなしまで何一つ女らしさを欠いた女である。この女の生きがいは訴訟という訴訟に全て勝つことである。しかるに他人の訴訟まで買いとり、詳しく調査し、策を練り、ただ法廷での勝利を夢みる。ところでふとしたことから、金で地位を買ったある司法官 Belastre に知り合う。この男は容貌も醜く、しかも無学無教養であるが性格は素朴である。この男は彼女から様々な訴訟上の知識と技術を習得する。訴訟の知識を無尽蔵に有する彼女にいつしかこの男は心引かれる。つまり、金で買えない何かをこの女に見出したのである。この男は Collantine の女としての心の扉を開くため、Charroselles という三流文士から恋文の書き方を教わり、彼からもらったある詩人の詩をそっくり盗用するが見事に彼女に見破られてしまう。こうして平行線をたどりながら物語は終盤を迎える。

要は、金銭によって覚醒した自我が、無反省な自己運動を続けた結果、極めて非人間的なものにまで成長し、逆にこの成長した自意識に人間そのものが支配され、いわば自意識を支える一つの道具にまで墮した姿が Collantine に他ならぬ。こうした怪物化した自意識が、自らの開放の場として訴訟を選んだと思われる。従って銭もうけの訴訟ではなく、勝つための訴訟が彼女を動かしているといえる。

又一方、Belastre は金で買える全ての虚栄は満足させたが、金で買えないものをこの Collantine に見出し、女としての Collantine ではなく、訴訟知識、訴訟技術、そして何よりも訴訟に賭けた彼女の執念に引かれているのである。ここには作者の町人に対する透徹した鋭い視線を感じるのである。当時の、いわば比較的目ざめた町人の自意識の内部さえも鋭くえぐっているといえよう。

#### c. 影の人物 “ある貧乏詩人”

第二部の最後に偶然ある詩人の遺書と財産目録が発見される。そして Collantine. Belastre Charroselles が書記にこれを読ませる。そしてその内容を紹介してこの物語は終わっている。財産目録の内容は、財産と呼ぶに値しない身のまわりの調度品数点でしかない。机がわりの木箱、麦わらのベッド、椅子、古ぼけたカバン、そして原稿と原稿用紙位のものである。原稿用紙の中身は、日頃この詩人の考えていた主として詩人の置かれた状況への不満、例えば文士のパトロンについて、あるいはパトロンの質について、又、援助を受けるに値する文士の資格について、等々のことが個条書にされている。その意味するところは、この詩人が大したパトロンも得ず、自分の詩を発表する機会も得ぬまま、貧困と孤独の中に死亡したことを暗示している。

この内容を見て、先の三人はしばし絶句するのである。

ところでこの遺書と財産目録は何を言わんとしているのだろうか。又いかなる意図で作者はこれを物語の最後にもってきたのだろうか。

この詩人から連想されることは多い。先ず当時のめぐまれぬ詩人、作家、特に当時異端視された Baroque 派の詩人達のこと。そしてパトロンを持

つことを嫌った詩人達のこと。そして何よりも不遇の晩年を迎えた作家、Furetière 自身のこと等々。

そして暗喩された内容は、このロマンに登場する全ての哀れな町人達への対比関係から生じる鋭い諷刺であろう。

以上、この二つのロマンの登場人物に見られる行動の面での特徴を列挙してみた。人物描写に表われた共通点と相違点がここでは相当の格差になっているようだ。つまり *Le Roman Comique* ではロマネスクな恋物語、あるいは冒険的な放浪の旅が強く印象づけられているが、*Le Roman Bourgeois* では町人の極めて現実的で功利的なモラルが強張されている。この二つの特徴は全体的に見て、この二つのロマンの性格を形成する重要な要素であることはいうまでもない。しかも第二章でみられるようなリアル手法でこうした行動ないし性格が描かれたことは、十七世紀にあっては実に画期的な試みであったと思われる。

Corneille, Racine, Molière といった、いわゆる古典主義詩人達の作品は今なお世界的な広がりの中で受読され研究され、しかも古典主義文学の華として輝いている一方、いわゆる古典主義の諸法則に反抗し従わなかったという理由で、何世紀も文学史上から葬られ、陽の目を見なかったこの不幸な二人の作家の小説の持つ意味は想像以上に大きく思われてならない。彼等二人がロマンに託した意図、表現法、そして何よりもロマン全体から湧れる熱気と緊張感は、今日的評価に十二分に堪え得るのではなからうか。又、何にも増して重要なことは、フランス十七世紀にこうした小説が書かれたことの意味を問い続けることではなからうか。

#### 注

1) *Le Roman Comique* について

«Le Comédien la Rancune, un des principaux héros de notre roman, car il n'y en aura pas pour un dans ce livre-ci [...] (Pléiade 版テキスト annotés par A. Adam. p. 540)

*Le Roman Bourgeois* についてはその冒頭で作者は次の様に言っている。

«Au lieu de vous tromper par ces vaines subtilités, je vous raconterai sincèrement et avec fidélité plusieurs historiettes ou galanteries

arrivées entre des personnes qui ne seront ni héros ni héroïnes [...]  
(P. Tannet 編テキスト p. 4)

- 2) pléiade 版テキスト, annotés par A. adam (p. 48)
- 3) 作品の中では Mythophilacte の名前で出てくるが, A. Adam によれば Tristan l'Hermite が有力なモデルと考えられている。Pléiade 版テキスト (p. 1467)
- 4) 周知の通り, ヴィヨンの *Les Lais* の中に出てくる, 諷刺的に書かれた贈り物の内容と良く似ている。
- 5) Destin は小貴族, Léandre は地方大貴族の出であり Etoile は貴婦人の娘である。こうした元貴族が身分を捨て, 旅役者という最下層の階級に敢えて身を落すことが *déclassé* という言葉で表現されている。C. Dédéyan の講義録 *Le Roman Comique de Scarron* 参照。
- 6) 注(1)参照, 著者以外の手によって書かれた, 序文にも警告の意図は伺える。
- 7) (7)本文は十七世紀的綴字法で書かれているが, できる限り現代法に直して紹介した。
- 8) *Littérature française L'Age classique 1624—1660* par A. Adam (p. 138) 参照。
- 9) Pléiade 版テキスト (p. 34—) 参照。
- 10) C. Dédéyan の上記の講義録 (pp. 284—285)
- 11) *ibid* (p. 286—) 参照。
- 12) (12)*Oeuvres Complètes de Scarron, Le Roman Comique.* (établi et présenté par Henri Bénac) の introduction 参照。
- 13) (13)Pléiade 版テキスト (pp. 42—50) 参照。
- 14) P. Tannet 編テキスト, *Le Roman Bourgeois.*, P. Tannet 解説参照。
- 15) 19世紀の作家, 例えばバルザック等のいわゆるリアリズム作家を指す。
- 16) 注(14) 参照。
- 17) 例えば Rancune, あるいは, 大道商人の甘言に乗せられ, まんまとだまされる。
- 18) Destin, Rancune, あるいは, ある大男の田舎貴族, 又 Destin にいい寄る, ある, 太った貴婦人等にもこうした対比が見られる。
- 19) (19)藤井康「生古典主義における『真実らしさ』の問題について」(人文研究) 大阪市大文学部紀要, 第20巻, 第11分冊, 参照。
- 20) (20)Pleiade 版テキスト (p. 638) 参照。